



中国都市部における育児支援からみる「ネットワーク化された核家族」の形成過程：夫方祖父母と妻方祖父母の区分を通じて

侯, 佳慧

(Citation)

綜合文化, 1:115-129

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100496707>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496707>



■自由投稿

〔論文〕

中国都市部における育児支援からみる 「ネットワーク化された核家族」の形成過程

——夫方祖父母と妻方祖父母の区分を通じて——

侯 佳 慧

(HOU Jiahui)

1. はじめに

中国における工業化と都市化の進展に伴い、同居世帯の規模が縮小する傾向が見られる。図1に示すように、平均世帯規模は2013年に初めて3人を下回り、2.97人となった。さらに2022年には2.76人となり、1998年から0.88人減少している（国家统计局 2023；国家统计局 1999）。また、王（2013）による1982年から2010年までの国勢調査データの分析によれば、夫婦と子どもから構成される核家族世帯の割合は68.30%から60.89%へと着実に減少しているものの、依然として主流であることが確認されている。

核家族が家族構造の中心を占める一方で、親族ネットワークは現代社会においても完全に崩壊したわけではない。むしろ、リスク社会における現代家族のサポートシステムとして、重要な役割を果たしている。馬、石、李らの研究グループは、改革開放から30年の間に中国の家族がどのように変化したのかを探るため、2008年に広州、杭州、鄭州、蘭州、ハルビンの5都市における都市住民のデータを収集した（馬ほか 2011）。この調

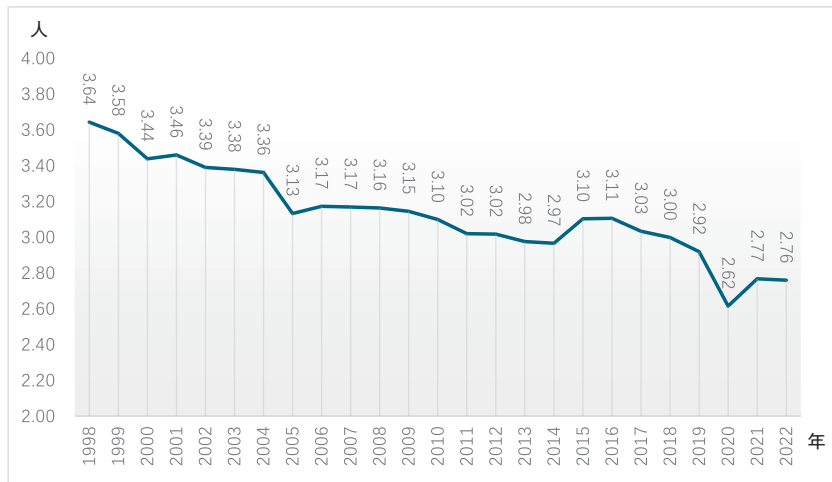


図1 平均世帯規模の推移

出典：国家统计局の統計年鑑（1999-2023）を基に筆者作成。

査では、結婚費用、結婚の独立性、女性の就業率と夫婦関係、核家族と親族ネットワークとの関係、さらには各都市における家族の変化の特性といった複数の側面に焦点を当てている。特に親族ネットワークに関する分析では、中国の都市における核家族（夫婦のみの家族を含む）は、依然として親族ネッ

トワークと密接に結びついており、「ネットワーク化された核家族」が進行していることが明らかになった。つまり、都市部の核家族は、居住地や交流の面で孤立しているわけではなく、ほとんどの家族が両親や兄弟姉妹と同じ都市、またはその近隣に住んでおり、週に1～2回以上の頻度で両親を訪れている。親密で情緒的な交流が保たれているだけでなく、経済的・非経済的な面においても、世代間での相互扶助が充実していることが確認された。

祖父母の支援は、特に子育て中に集中する。例えば、『中国家族発展報告書2015』によると、全国の0～2歳の子どものうち、60～70%が祖父母の助けを受けて養育されており、そのうち30%が完全に祖父母によって育てられている。祖父母の45%が5歳以下の子どもの世話を担っている（国家衛生和計生育委員会 2015）。また、都市であれ農村であれ、祖父母が育児を手助けする現象は非常に一般的である。李向梅と万国威は、2012年の中国総合社会調査（CGSS）および2010年の第3期中国婦女社会地位調査（CWSSC）のデータをもとに分析を行い、一般的な家族が育児サービスを利用することが困難であることを明らかにした。そのため、中国の大多数の家族は育児の負担が重く、家族単位で子どもの世話をを行っている割合は、都市部で99.7%、農村部で92.8%に達していることが示されている。市場による代替的なケアの割合は、都市部で7.2%、農村部ではわずか0.3%にとどまっており、その利用が極めて限定的であることがわかった（李・万 2019：141）。

この現象が生じる理由について、唐（2017：162）は次のように述べている。改革開放後、まず、計画経済時代に確立された「単位」¹制度に基づく社会保障制度が解体され、育児は個人化・市場化が進み、子どもの養育は再び家族の責任に戻った。また、国家は過度な市場化や商品化を十分に規制できず、集団主義的な価値観は「成功主義」という資本主義的な論理に取って代わられた。この変化により、個人や家族の生活空間が圧迫され、核家族における育児機能が弱体化された。同時に、一人っ子が主流となる中で、世代間協力による育児と家事労働の条件が整い、それが「慣習」として継承されている。また、肖（2014：168）は、世代間協力は、都市部の家族が子育てにおける責任の個人化や市場化に対応するために採用する家族戦略である。

本研究では、中国において育児支援を契機に、核家族と拡大家族が新たな形で密接に結びつき、「ネットワーク化された核家族」が形成されている事例を取り上げる。馬ら（2011）の説明によれば、「ネットワーク化された核家族」とは、中国の都市部において、核家族が独立した個々の存在として孤立するのではなく、血縁や婚姻といった関係を通じて密接なネットワークを構築している状態を指す（馬ほか 2011：209）。このような関係性の中で、必要に応じて拡大家族が核家族に対してタイムリーな支援を提供している。支援の内容は、経済的支援、情緒的支援、身体的支援を含み、特に身体的支援の

1

労働者の職場としての企業、工場、組織、機関等を意味する中国語。かつては行政管理の機能を持ち、福利厚生や社会的資源の分配の場でもあった。

典型例として、育児期における育児支援が挙げられる。そこで本研究では、都市部の家族における子育て期の祖父母による育児支援に注目し、その支援を通じて「ネットワーク化された核家族」がどのように構築されるのか、そのプロセスを明らかにすることを目的とする。

具体的には、8人の母親を調査対象として、半構造化インタビュー調査を実施し、質的分析を行う。母親を強調するのは、家族内のケア責任は主に母親によって無償で担われてきたからである。調査期間は2024年3月から4月までの2ヶ月である。また、中国における急速な都市化の進展に伴い、都市化率は1949年の10.64%から2023年には66.16%にまで上昇した（中華人民共和国中央人民政府 2024）。その結果、今回の調査対象となった都市部の居住者の多くが、農村地域出身の親世代を持つという一般的な現象が見られるようになっている。

2. 先行研究の整理と検討

2.1 祖父母の育児支援における都市と農村の違い

まず、祖父母が育児支援を提供することに関する研究は、地域によって区分され、主に都市研究と農村研究の2つの部分に分けられる。その理由としては、祖父母による育児サポートの形態は、都市部と農村部で異なるからである。都市部では、祖父母と親が協力して行う「共同育児」が一般的である一方、農村部では祖父母が主に育児を担う「隔代育児」が主流である。

農村に関する研究では、現在の農村家族構造において、世代間分業を基盤とした「半労半耕」の構造と、それに伴い形成された「新三代家族」が、中国の都市化の進展における重要な現象であると指摘されている（楊 2015；賀 2018）。これらの研究によれば、農村家族内では世代に基づく労働分業が確立されている。孫世代の親は都市に出稼ぎに出て、家族の主要な経済的支柱を担い、他方で、祖父母世代は農村に残り、農作業と孫の世話を担当する。このような世代間の分業は、都市化の進展への対応であると同時に、親世代が祖父母世代に対して行う世代間搾取をも象徴している。さらに、王也は、農村における隔代育児について「大家族・小個人」という原則が依然として貫かれていると論じている。家族の物質的資源は「孫のため」（個人のため）という名目で集められるものの、それが孫の成長や教育に十分に活かされていないと指摘している（王也 2022：229）。

都市に視点を移そう。肖索未（2014）は、都市部の家族に広く見られる世代間の共同育児の現象を調査し、その権力関係を詳細に分析した。その結果、世代間の共同育児の過程で、家族内に「嚴母慈祖」²（厳格な母親と優しい祖父

2

ここの言葉は元々「嚴父慈母」という形であり、文字通り「厳格な父親」と「慈愛に満ちた母親」を指す。伝統的な家庭教育では、夫と妻が異なる役割を担っていることを示していた。しかし、ここで肖索未はその主体を母親と祖父母に置き換え、家族内での育児における役割の変化を強調している。

母)というパターンが形成されることを明らかにした。母親は子育ての「最終責任者」として、「科学的子育て」や子どもの発達に関する全体計画を主導している。一方、祖父母は「ヘルパー」として核家族に組み込まれ、身体的育児や家事を多く担うが、家族内での意思決定や発言権からは疎外されがちである。さらに、世代間協力において、祖父母が「保姆(家事労働者)化」する傾向さえ見られる(沈 2013: 268-270)。つまり、祖父母が大半の家事・育児を担いながらも、ほとんどの意思決定権を放棄している状況が見受けられる。

以上の先行研究から、都市部でも農村部でも、祖父母による育児支援が核家族にとって主要な育児協力の手段であることが認識される。しかし、具体的な育児の形態が異なるため、都市と農村の問題を一概に論じることはできないと考えられる。本研究では、都市に焦点を当て、祖父母による「共同育児」の現象を対象としてそのプロセスについて考察を行いたい。

2.2 都市部における祖父母による育児支援に関する研究の現状

農村と都市における祖父母による育児支援の違いを理解した上で、次に都市部における祖父母が育児を支援する研究の現状について整理する。

まず、上海を例に挙げる。2016年に復旦大学が実施した長江デルタ地域の社会変動追跡調査(FYRST)によると、80年代生まれの既婚者を対象にした上海の家庭のうち、85%以上が共働き家庭である。さらに、91.48%の家庭では子どもの世話に祖父母の助けが必要とされており、そのうち65.77%の祖父母はほぼ毎日子どもの世話に関わっていることが明らかになった(復旦大学社会科学データ研究中心 2017)。

育児における世代間の協力において、「責任」と「権利」の不均衡は、研究における重要なテーマとなっている。費孝通によると、中国では親が子どもを養育し、子どもが老親を扶養するという「フィードバック式」の世代間関係が形成されている(費 1947)。この「フィードバック式」では、親が子どもを育て、その後、子どもが親を支えるという双方向の関係が特徴である。現在、祖父母による育児サポートもこのフィードバック式の一環とされている。しかし、多くの研究が指摘するように、特に一人っ子として成人した子どもが、経済的支援やケア、情緒面において親から多くの支援を受ける傾向が強く、子どもから親への支援を上回るケースが多い(馬ほか 2011: 209; 劉 2011: 88)。この現象は、一部の学者によって「恩が下に流れる」または「涙が下に流れる」と表現されている(劉 2005; 黄・梁 2024)。

また、祖父母による育児サポートには明らかなジェンダー格差が存在する。李らが幼児を持つ親 317 名を対象に実施した質問紙調査によると、育児の大部分は祖母が担っており、祖父の参加は極めて少ないことが分かった(李ほ

か 2016)。さらに、Chen らの研究では、中国家庭栄養健康調査（1991 年～2004 年）のデータを用いて、母親と祖母が就学前の子どもの世話に費やす時間にほとんど差がないことが示されている。また、祖父の育児参加が予想通り少ないことも確認され、具体的には、祖父が週平均 7 時間、祖母が 21.1 時間、母親が 25.3 時間を育児に費やしていることが明らかになっている。この結果は、祖母が母親とほぼ同等の育児役割を担っていることを示唆している（Chen ほか 2011）。

祖父母が育児サポートに関わる話題になると、「祖父母は子どもを甘やかしがちで、若い親の育児方法の方がより『科学的』である」という意見をよく耳にする。このように、祖父母の育児には何らかの問題があるという共通の認識が存在している。確かに、心理的発達のレベルでは、祖父母のみが養育する子どもは、三世代同居で祖父母が育てる場合や、三世代同居で親が育てる場合、さらに親のみが養育する場合に比べて、著しく低いことが明らかになっている。しかし、郭（2014）の研究によれば、言語能力や実行機能の発達レベルにおいて、異なる養育方式で育った子どもたちの間に顕著な差がないことが確認されている。また、他の研究でも同様の発見があり、親が長期間「不在」の場合に限り、隔代育児が子どもの心理的発達に悪影響を及ぼすことが示されている（魯ほか 2012）。さらに、隔代育児や親子養育と比較して、混合養育が子どもの発達に最も良い影響を与えることが明らかになっている（王・陳 2018）。以上のことから、祖父母による育児サポートが子どもの発達に悪影響を与えるという考えは、それほど一般的ではなく、むしろ育児における親の不在が問題であることが示されている。

以上のように、これまでの研究では、主に育児支援の実態に焦点を当て、世代間関係、ジェンダー格差、育児方法などの観点から議論が展開されてきた。しかし、都市部における核家族の育児支援がどのような経緯で提供されるのかについては、十分に解明されていないのが現状である。また、既存の研究においては、量的調査・質的調査を問わず、支援を提供する主体である祖父母を一括りに論じる傾向が見られる。夫方の祖父母と妻方の祖父母が区別されていない背景には、中国における家族形態の急速な変化があり、研究の焦点が主に世代間関係や近年特に注目される教育分野に集中している点が考えられる。その結果、祖父母による育児支援という行為そのものについて、十分に掘り下げた議論が行われていない。しかし、祖父母には夫方の祖父母と妻方の祖父母という区分があり、両者の間には明確な違いが存在すると考えられる。これらを区別して考察することで、祖父母による育児支援の実態をより具体的に明らかにすることが可能となるだろう。

以上を踏まえ、本研究では、夫方および妻方の祖父母を区別して分析し、都市部における育児支援の観点から、「ネットワーク化された核家族」の形成

プロセスを解明することを目的とする。

3. 調査の概要

中国浙江省寧波市において、2024年3月から4月までの2ヶ月間、8名の母親に対して半構造化インタビュー調査を実施した。調査項目は、①属性：年齢、職業、婚姻状況、配偶者の年齢と職業、家族構成など、②親族支援の利用：開始時期、利用のきっかけ、交渉方法など、③ケアの分担：結婚以来の各段階におけるケアの担い手と分担状況など、④親族支援に対する意見、⑤将来の利用予定（現在利用停止している場合はそのタイミングと理由）などである。調査対象者の選定にあたっては、浙江省寧波市に居住して、現時点では子どもが小学校に通っている女性を対象として選んだ。

調査対象者の概要は以下の表1に示されている。調査対象者の年齢層は35歳から39歳までで、全員が既婚である。最終学歴については、7人が大学卒業、1人は高等専門学校卒業であり、高学歴に限定されている。1組の夫婦は、夫婦そろって寧波市の出身である。もう1組の夫婦は、夫が寧波市出身で、妻は他地域の出身である。さらに、1組の夫婦は夫が浙江省内の出身で、妻が他省の出身である。残りの5組の夫婦は、夫婦ともに浙江省外の出身である。以上の背景を踏まえ、本調査の対象者は都市中産階層に属すると考えられる。

調査時点の家族構成に関しては、6人が核家族として生活しており、2人は夫と別居し、夫の母と同居している。また、ケアの分担における親族の参与については、（祖父母の支援を受けているかどうかは関係なく、対象者を探したが、全員が親族からの支援を利用している・した経験がある。その中で、6人は夫の両親、特に夫の母から支援を受け、1人は妻の母から、もう1人は両親と夫の両親と1年ごとのローテーション制で同居している。

表1 調査対象者の概要

名前	年齢	最終学歴	出身地	現職	夫の出身地	夫の職業	婚姻状況	調査時点の家族構成
A	38	大卒	寧波市	教員	寧波市	会社員	既婚	4人（夫40、息子12、娘5）
B	35	大卒	山東省	会社員	黒龍江省	会社員	既婚	3人（娘7、夫の母）+夫（仕事の関係で別居）
C	37	高専卒	湖北省	自営業	寧波市	工場経営者	既婚	3人（夫37、息子12）
D	39	大卒	湖南省	教員	浙江省	会社員	既婚	4人（夫39、娘12、息子7）
E	38	大卒	四川省	教員	四川省	会社員	既婚	4人（夫39、息子12、娘5）
F	38	大卒	江西省	教員	湖北省	公務員	既婚	4人（夫40、息子12、息子3）
G	38	大卒	湖北省	教員	湖北省	会社員	既婚	3人（夫39、娘12）+息子2（夫の母と一緒に妻の実家に帰った）
H	37	大卒	河南省	教員	河南省	会社員	既婚	4人（娘7、息子5、義父）+夫（仕事の関係で別居）

4. 育児支援ネットワークの形成過程

4.1 支援のはじまり

調査対象の家族における祖父母からの支援のタイミングと交渉方法は以下の通りである。A家では、夫が出産前に夫の母へ支援を依頼し、夫の母が出産直前から同居を開始した。B家では、妊娠中に夫の母が支援を申し出て、出産直前から同居を開始した。C家では、妊娠3か月頃に夫婦で相談し、夫の両親が高齢のため、妻の母に出産直前から同居してもらうことを決定した。D家でも妊娠中に夫の母が支援を申し出て、出産前から同居を開始した。E家では、妊娠中に夫が夫の母に支援を提案し、夫の母が出産直前から同居を開始した。F家では、結婚時に既に妊娠しており、夫の母が支援を申し出て、出産後2か月間同居し、その後子どもを彼女の家に来て育て育児を続けた。G家では、妊娠3、4ヶ月ごろに夫の母に依頼し、夫の母が出産予定日の20日ほど前に来て、同居し始めた。H家では、妊娠中に家族会議で相談し、Hの両親と夫の両親が1年間交代で子どもの世話をすることに決定した。

要するに、祖父母による支援の開始時期はいずれも出産前後に集中している。交渉方法は以下の四種類に分類される。1、夫が夫の母に支援を依頼したのは、A家とE家である。2、夫の母が支援を申し出たのは、B家、D家、F家である。3、夫婦で現状を考慮し、妻の母に支援を依頼したのは、C家である。4、H家では、H夫婦、Hの両親、夫の両親と一緒に相談し、交代で子どもの世話をを行うことに決めた。

表2 初期の育児支援

	開始時間	支援をする人	支援の形式
A	出産直前	夫の両親	自分たちの家に同居
B	出産直前	夫の母	自分たちの家に同居
C	出産直前	妻の母	自分たちの家に同居
D	出産前	夫の母	自分たちの家に同居
E	出産直前	夫の母	自分たちの家に同居
F	出産前後	夫の両親	同居していた（しばらくして、子どもの入園前まで夫の両親に預けていた）
G	出産前	夫の母	同居していた
H	出産直前	ローテーション制：妻の両親と夫の両親	自分たちの家に一年ずつ交代で同居

ここでは、妊娠中に夫の母から提案されたケースFを述べる。Fは調査時点で38歳、小学校に務めており、夫は40歳の会社員で、二人の息子（12歳と3歳）がいる。夫の両親からの育児支援について、どのように決定したのか、Fは次のように語っている。

私たちが結婚のために帰省したとき、夫の母はすでに妊娠していることを知っていたんです。それで皆がとても喜んでくれて、夫の母もその時「ゆっくり体を休めて、出産後には手伝いに行くからね」と言ってくれました。まあ、その時にそんな約束をしたような感じです。ただ、夫の母がどれくらいの期間来てくれるのかは具体的には決めていませんでした。正直なところ、夫の母の家では農作業が忙しいので、長くは滞在できないことも分かっていました。ですので、具体的な滞在期間については、その時になってから様子を見ることにしていました。(F)

そして、最初の息子を出産した際、夫の両親がFの家に来て、義父は数日間滞在して帰宅したが、夫の母は約2ヶ月間Fの家で一緒に過ごした。その後、夫の母は息子連れて彼女の家での子育てを続け、幼稚園入園の3ヶ月前に再び息子と共にFの家に戻った。義父は約1ヶ月滞在し、夫の母は息子の入園後に自分の家へ戻った。

二人目の息子のときも、夫の両親から同様の育児支援を受けたが、一人目の経験を踏まえ、今回は入園の半年前から夫の母がFの家に戻り、入園後も約1ヶ月間同居した後に自分の家へ帰った。

なぜ夫の母が子どもを連れて彼女の家で育てることを同意したのかについて、Fは以下のように述べた。

夫の母が帰ってしまうと、私たちには仕事と子育てを両立するのは到底無理だと思いました。それに、夫の母も帰る前は本当に名残惜しそうで、「あなたたちは仕事が忙しいし、孫もとても可愛いから、私が連れて帰って面倒を見てもいいのよ」と言ってくれたのです。ただ、正直なところ、子どもと離れるのは寂しく、できれば側で育てたいという気持ちもありました。しかし、夫の母も子どもが大好きで、一緒に過ごしたいという強い思いがあり、私たちも安心してお願いできると感じました。何度も話し合いを重ねた結果、夫の母に子どもを連れて帰ってもらうことに決めました。(F)

Fの事例によると、Fの妊娠を知った夫の母が、自ら進んで子どもが生まれた後の手助けを提案し、Fもそれに特に迷いはなかった。このことから、子どもが生まれた後に夫の母が手伝いに来ることは、夫の母やFにとってごく自然なことであり、特別なことではないとわかった。その後、夫の母が自分の家に戻る必要が生じた際、F夫婦は仕事で忙しく、子どもの世話が難しかったため、夫の母が子どもを彼女の家連れて帰り面倒を見ることを提案した。Fは、子どもを自分のそばで育てたいという思いから当初はためらい

があったが、最終的には同意した。それにより、都市部の家族において、隔代育児、すなわち祖父母が単独で子どもの世話をするという形態が必ずしも一般的ではないことが示唆された。

4.2 育児支援ネットワークの構成要件

この節では、育児支援ネットワークを構成できる家族について、調査対象者本人の両親及び夫の両親の基本状況を確認する。それを基に、育児支援ネットワークを構成可能な条件を考察する。

調査対象者本人の両親及び夫の両親の基本状況は以下の表2のとおりである。太線で表示されているのは育児支援を提供している・していた方である。

表3 妻側・夫側の両親の基本状況

	両親（妻）			兄弟姉妹数	居住地	主な移動方式	移動時間	両親（夫）			兄弟姉妹数	居住地	主な移動方式	移動時間
		現職	年齢						現職	年齢				
A	父	退職	65	2	寧波市	車	15min	父	退職	65	2	寧波市	車	30min
	母	退職	66					母	退職	63				
B	父	教員	59	2	山東省	飛行機	1.5h	父	自営業	54	1	黒龍江	飛行機	3h
	母	自営業	58					母	無職	58				
C	父	会社員	63	2	湖南省	新幹線	7h	父	農民	70	2	寧波市	車	1h
	母	内退 ³	63					母	農民	71				
D	父	農民	65	4	湖北省	新幹線	6h	父	退職	63	3	浙江省 麗水	車	4h
	母	農民	67					母	無職	63				
E	父	農民	65	2	四川省 重慶	車	23h	父	農民	71	2	四川省 重慶	車	23h
	母	農民	63					母	農民	70				
F	父	農民	63	4	江西省	新幹線	4h	父	農民	65	3	湖北省	車	12h
	母	農民	62					母	農民	63				
G	父	農民	60	2	湖北省	新幹線	6h	父	農民	63	2	湖北省	新幹線	6h
	母	農民	61					母	農民	63				
H	父	農民	63	3	河南省	バイク 車	30min 11h	父	農民	62	2	河南省	バイク 車	20min 11h
	母	農民	65					母	農民	63				

3 中国の「内退（内部分配退職）」とは、正式な定年退職ではないものの、労働者が企業を辞めて定年退職のような扱いを受ける制度を指す。この制度は主に国有企業で採用されており、労働者を早期に退職させて人員整理やコスト削減を図ることを目的としている。

C家およびH家以外の家族では、育児支援の親族ネットワークがすべて夫の両親によって構成されている。一方で、Cは夫と相談の上、自身の母親に支援を依頼すると選択をした。その理由は、夫の両親が高齢（Cの両親よりも7～8歳ほど年上）であり、身体的な負担から子どもの世話をするために足を運ぶことが難しい状況にあるためである。また、Cの夫は、仮にCの母親がサポートする場合、料理の味付けやコミュニケーションの面において、C自身にとってより快適で負担の少ない環境が整うだろうと考えている。H夫婦は、双方の兄弟姉妹が多く、それぞれの家族も両親の支援を必要としていることから、特定の一方の親だけをH家に招いて支援を受けるのは現実的ではないと指摘している。このため、H夫婦は両方の親と協議した結果、それぞれの両親が交代でH家を訪れ、育児を支援する方法を採用するに至った。

A の両親の家は A 宅から比較的近い距離にあるにもかかわらず、A は夫の両親に支援を依頼し、同居を求めた。一方、B の場合、夫の両親の家が B 宅から遠いにもかかわらず、妊娠中に夫の母が自ら支援を申し出た。同様に、D の場合も妊娠中に夫の母が自発的に支援を提案した。E の家族では、夫の母が妻の母より年長であるにもかかわらず、まず夫の母に支援を依頼した。F のケースでは、物理的距離が遠い夫の母が自発的に支援を申し出た。G もまた、年齢が高めの夫の母に対して支援を依頼し、自宅へ来てもらう形を選択した。

本調査における 8 名の対象者の事例分析から、育児支援が必要な際、支援を依頼する対象の選択には、双方の親の身体的状況や多忙さが重要な影響を及ぼすことが明らかとなった。一方で、特段の理由がない場合には、親との居住距離や親の年齢が支援対象の選定に直接的な影響を及ぼさないことが、本調査の結果から新たに示唆された。この発見は、従来の研究で十分に触れられていなかった点であり、親の地理的・年齢的要因が支援選定に与える影響の限定性を明確にするものである。

さらに、双方の兄弟姉妹数や親の職業、居住距離にかかわらず、多くの家族ではまず夫側の両親、特に夫の母親に支援を依頼する傾向が見られた。また、妊娠中に夫の母親が自発的に育児支援を申し出る事例も少なくないことが確認された。

4.3 終了のタイミングとその理由

祖父母による支援の終了には 2 つのパターンが見られる。1 つ目は、A、C、D、E、F、G の家族において、祖父母の支援が子どもの入園前後に終了する傾向があることである。この主な理由は、子どもが幼稚園に入ることによって手がかかることが減少するためである。また、祖父母が長期間自宅を離れて子どもと生活する中で、自分たちの独立した時間や空間が欲しくなることもある。さらに、祖母の中には夫を残して単独で子どもの世話を手伝いに来ている方がおり、家に残っている夫の生活が気がかりである場合もある。

もう 1 つのパターンは、B と H の家族である。これらの家族では、夫が仕事の関係で別居しているため、日常的な家事や育児の負担を家族内で担うことができず、その代わりとして祖父母が積極的にサポートを続けている。このため、支援の終了時期も遅れる傾向がある。B は調査時点で祖父母の支援を継続しているが、娘が小学校 5 年生または 6 年生になった際に支援を終了する予定である。その理由は、娘がその頃には 1 人で帰宅できるようになるからである。H も、2 人目の子どもが小学校に入学する時期前後を支援終了の目安としており、その時期には娘と息子が同じ小学校に通うため、H1 人でも対応しやすくなると予想している。

ここでは、パターンⅠにおけるAの事例について詳述する。Aは調査時点で38歳の教員であり、夫は39歳の会社員である。12歳の息子と5歳の娘がいる。息子が誕生した際に、夫の両親がA家に来て同居し始めた。そして、息子が3歳になり幼稚園に通い始めた後、夫の両親は自身の家に帰りたいと希望を伝えた。その理由について、Aは以下のように語っている。

子どもが幼稚園に通うようになったので、送り迎えについては基本的に私たちが時間を取ることができるようになりました。ただし、たまに特別な事情がある場合には、おじいちゃんやおばあちゃんにお願いして迎えに行ったり送ったりしてもらうこともあります。でも、これはあくまでたまにのことですね。普段は基本的に私たちで対応できます。そして、おじいちゃんやおばあちゃんにはもっと自由な時間を持ってもらいたいとも思っています。高齢者ですし、自分たちの生活や趣味もあると思うので、その時間をもっと大切にしてもらいたいと考えています。(A)

また、この計画を立てた時期について、Aは次のように回答している。

幼稚園に通う前、大体半年前くらいでしょうか、その頃からこの計画を考えていました。正直なところ、おじいちゃんとおばあちゃんには何年もの間、私たちのために本当に一生懸命手伝ってもらっていたので、少しでも楽をしてもらいたいと思ったんです。そして、その時にまずおじいちゃんとおばあちゃんに相談しました。すると、「もし何かあればいつでも手伝いに行くから」と言ってくれて、快く賛成してくれました。みんなとても喜んで、このように決めたんです。(A)

Aによれば、祖父母が育児支援を終了した主な理由は、子どもが日中を幼稚園で過ごすようになり、この程度の負担であればAと夫が仕事の合間を利用して十分対応可能であり、特別な事情が生じた場合のみ祖父母の助けが必要な状況となったためである。また、それ以前に祖父母は長期間にわたり多大な時間と労力を費やして子どもの世話を支援してくれており、彼ら自身が自由な時間を持ち、人生を楽しむべきだという配慮も背景にあった。さらに、第1子の育児経験があったことから、娘が生まれた際にも夫の両親が支援を行ったが、今回の支援終了のタイミングについては、Aの説明によれば、特別な話し合いを行うことなく自然と暗黙の了解が形成されていたという。そして、この支援の終了は、娘が幼稚園に入園した後、自然な形で実現された。

5. 考察

都市部に居住する母親8名を対象に実施した調査から、各家族における祖父母による育児支援の実態が明らかになった。この結果を踏まえ、育児支援の側面における「ネットワーク化された核家族」の形成プロセスを、以下のように整理することができる。

まず、このプロセスには明確な開始時期が存在し、それはおもに子どもの出産前後に集中していることが判明した。多くの家族では、夫の母に対して育児支援を依頼するか、あるいは夫の母から支援の申し出を受けるケースが多く見られた。そのため、夫側の両親、とりわけ夫の母親が育児支援を提供する傾向が顕著であることが示された。

また、育児支援ネットワークの構成要因についての分析から、兄弟姉妹の数、祖父母との居住距離、年齢といった要素が直接的に支援対象の選定に影響を及ぼすわけではないことが示唆された。一方で、支援の終了時期には一定の傾向が見られ、多くの家族において子どもの入園前後に支援が終了する場合が多かった。しかし、夫と別居している場合には祖父母がより積極的に支援を継続し、その終了時期が遅れる傾向も確認された。

以上の結果から、祖父母による育児支援の側面に着目すると、「ネットワーク化された核家族」は一定期間に集中した構造を持つことが明らかとなる。このような構造は、核家族が育児支援を必要とする期間が明確な「はじまり」と「おわり」を伴う世代関係であることを反映している。その結果として、都市部では一時的に拡大家族が形成される状況が見出された。

一方で、祖父母を夫方祖父母と妻方祖父母に区分して「ネットワーク化された核家族」の構成プロセスを検討することで、育児支援の過程における父系親族規範の存続が明らかになった。家族規模が縮小するにつれ、核家族が主流の家族構造となり、拡大家族は徐々に解体されていった。この過程で伝統的な家父長制の影響は弱まる一方、核家族の地位が向上している。しかし、この変化にもかかわらず、父系親族規範には大きな変化が見られない。母親が産んだ子どもは依然として夫側の家族の後継者とみなされ、育児期において支援が必要となった際には、夫方祖父母が積極的にその役割を引き受け、主体的に育児支援を行うケースが多く確認される。子どもの世話は夫方祖父母の責任であるという認識が、夫婦双方および祖父母双方の間で暗黙の了解として共有されていると考えられる。

今回の調査対象となった8名の母親のうち、妻方祖父母が育児支援に関与したケースは2例であった。この事実は、一見すると父系親族規範の揺らぎを示唆するようにも見える。しかし、インタビューの中で、妻方祖父母が育児支援を行ったと回答した母親たちは、その理由を自然に説明する傾向があっ

た。例えば、夫方祖父母が高齢で健康状態が良くない、または双方の祖父母に複数の子どもがいるため、一方の祖父母だけに頼ることが困難であるといった理由が挙げられた。一方、残りの6名は夫方祖父母が支援を行ったと回答したが、その理由を特に説明することはなかった。この違いは、子どもの世話は基本的に夫方祖父母が行うべきであるという社会的な認識が広く共有されていることを示唆している。

また、既存の育児支援に関する先行研究を振り返ると、ほとんどの場合、祖父母を夫方と妻方に区別せず、一括して議論している点が見受けられる。この理由は明確ではないが、育児支援の主体が夫方祖父母であるという前提が広く受け入れられているため、祖父母を区別して考察する必要性が見過されている可能性がある。このような視点が省略されることで、議論は世代間関係の変化や育児・教育の側面に集中していることが指摘できるだろう。

6. おわりに

本稿では、インタビュー調査を通じて、都市部における育児支援の観点から「ネットワーク化された核家族」の形成プロセスを解明した。その結果、以下の点が明らかになった。(1) 支援の開始時期は子どもの出産前後に集中すること、(2) 兄弟姉妹の数、祖父母との居住距離や年齢といった要素は、支援対象の選定に直接的な影響を及ぼすわけではないこと、(3) 夫側の両親、特に夫の母親が育児支援を提供する傾向が顕著であること、(4) 支援の終了時期は、子どもの入園前後に集中する事例が多いこと。

さらに、夫方祖父母と妻方祖父母を区別して考察した結果、子どもが依然として夫方家族の後継者とみなされる傾向が確認された。これに伴い、育児支援の提供者は夫方祖父母であるべきだという社会的認識が広く共有されていることも明らかとなった。以上の結果から、父系親族規範が現在の中国都市部において依然として強く維持されていることが示された。

本研究には、事例研究の一般性および普遍性という課題が残るものの、祖父母を夫方と妻方に区別して考察することにより、育児支援の実態をより詳細に明らかにし、今後の祖父母による育児支援研究に新たな視点を提示できたと考える。しかし、本稿は都市部に対象を絞っているため、農村部では父系親族規範がより強固であることが想定されるものの、さらに検討が必要である。今後、都市部と農村部の結果を総合的に分析することで、中国における祖父母による育児支援の全体像が明らかになると考える。

【参考文献】

- Chen Feinian, Liu Guangya, Mair, Christine A., 2011, *Intergenerational Ties in Context: Grandparents Caring for Grandchildren in China*, Social Forces 90(2): 571-594.
- 复旦大学社会科学数据研究中心, 2017, 《FYRST-2013 上海地区基線調查》(2017 年 7 月 1 日, 复旦大学社会科学数据研究中心) (2024 年 10 月 29 日取得 <https://dvn.fudan.edu.cn/dataset.xhtml?persistentId=hdl:11521/0FBJGZ>).
- 費孝通, 1947, 《生育制度》商務印書館 (橫山廣子訳, 1985, 『生育制度 中国の家族と社会』東京大学出版会) .
- 国家統計局, 1999, 《中国統計年鑑 1999》中国国家統計局.
- , 2000, 《中国統計年鑑 2000》中国国家統計局.
- , 2001, 《中国統計年鑑 2001》中国国家統計局.
- , 2002, 《中国統計年鑑 2002》中国国家統計局.
- , 2003, 《中国統計年鑑 2003》中国国家統計局.
- , 2004, 《中国統計年鑑 2004》中国国家統計局.
- , 2005, 《中国統計年鑑 2005》中国国家統計局.
- , 2006, 《中国統計年鑑 2006》中国国家統計局.
- , 2007, 《中国統計年鑑 2007》中国国家統計局.
- , 2008, 《中国統計年鑑 2008》中国国家統計局.
- , 2009, 《中国統計年鑑 2009》中国国家統計局.
- , 2010, 《中国統計年鑑 2010》中国国家統計局.
- , 2011, 《中国統計年鑑 2011》中国国家統計局.
- , 2012, 《中国統計年鑑 2012》中国国家統計局.
- , 2013, 《中国統計年鑑 2013》中国国家統計局.
- , 2014, 《中国統計年鑑 2014》中国国家統計局.
- , 2015, 《中国統計年鑑 2015》中国国家統計局.
- , 2016, 《中国統計年鑑 2016》中国国家統計局.
- , 2017, 《中国統計年鑑 2017》中国国家統計局.
- , 2018, 《中国統計年鑑 2018》中国国家統計局.
- , 2019, 《中国統計年鑑 2019》中国国家統計局.
- , 2020, 《中国統計年鑑 2020》中国国家統計局.
- , 2021, 《中国統計年鑑 2021》中国国家統計局.
- , 2022, 《中国統計年鑑 2022》中国国家統計局.
- , 2023, 《中国統計年鑑 2023》中国国家統計局.
- 国家衛生和計劃生育委員會, 2015, 《中国家庭發展報告 2015》中国人口出版社 .
- 郭筱琳, 2014, 〈隔代扶养对儿童言語能力、執行功能、心理理論發展的影响: 一年追蹤研究〉《中国臨床心理学雜誌》22(06): 1072-1076+1081.
- 賀雪峰, 2018, 〈農村社会結構变迁四十年: 1978-2018〉《学习与探索》11: 59-65.
- 黃燕・梁麗霞, 2024, 〈“恩往下流”: 隔代照料对老年人主觀福祉的影响研究——基于人力資本和社会資本的中介探究〉《克拉瑪依學刊》14(04)7: 107-119.
- 刘桂莉, 2005, 〈眼泪為什麼往下流? 轉型期家庭代際关系傾斜問題探析〉《南昌大学学报人文社会科学版》06: 1-8.
- 刘汶蓉, 2011, 〈家庭價值的变迁和延續——来自四个維度的經驗証据〉《社会科学》10: 78-89.
- 李晓巍・謝娟・宋雅婷, 2016, 〈祖輩一父輩共同养育的特点及其与母親养育压力、幼兒問題行為的关系〉《中国特殊教育》04: 71-78.
- 李向梅・万国威, 2019, 〈育兒責任、性別角色与福利提供: 中国兒童照顧政策的展望〉《中国行政管理》4: 138-144.
- 魯影・朱鵬・高榮・梁貞貞・黃文・陶芳標, 2012, 〈城市地区扶养模式与幼兒飲食特征及氣質的關聯研究〉《中国当代儿科雜誌》14(01)7: 48-53.

- 馬春華・石金群・李銀河・王震宇・唐燦，2011，〈中国城市家庭变迁的趨勢和最新發現〉《社会学研究》25(02): 182-216+246.
- 唐曉菁，2017，〈城市“隔代扶育”：制度安排与新生代父母的角色及情感限制〉《河北學刊》37(01): 160-164.
- 王玲鳳・陳伝鋒，2018，〈教养方式在隔代教养与幼兒行為問題間的中介作用〉《中国学校衛生》39(08): 1192-1194.
- 王也，2022，〈倫理為表、經濟為里：農村祖父母的隔代扶養驅動力〉《廣東社会科学》02: 215-229.
- 王躍生，2013，〈中国城鄉家庭結構變動分析——基于 2010 年人口普查数据〉《中国社会科学》12: 60-77.
- 肖索未，2014，〈“嚴母慈祖”：兒童扶育中的代際合作与權力关系〉《社会学研究》29(06): 148-171+244-245.
- 沈奕斐，2013，〈个体家庭中国城市現代化進程中的个体、家庭与国家〉上海三聯書店.
- 楊華，2015，〈中国農村的“半工半耕”結構〉《農業經濟問題》9: 19-32.
- 中華人民共和國中央人民政府，2024，〈提高超 55 个百分点 75 年来我国城鎮化水平不斷提高〉(2024 年 9 月 23 日，中華人民共和國中央人民政府) (2025 年 1 月 18 日取得 https://www.gov.cn/lianbo/bumen/202409/content_6975921.htm).

(神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程／社会学)